第40回 全日本中学生水の作文コンクール

和歌山県入賞作品集

宝龍滝

和 歌 山 県

表紙の写真『宝龍滝』（和歌山県ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　ﾌｫﾄﾗｲﾌﾞﾗﾘｰより）

宝泉岳に掛かる上下二段の優美な滝で、高さは上段３０ｍ下段４０ｍあります。

あたり一面を虹色の飛沫で煙らせながら水が落ちていく様は、見る者にしばし時の経つのを忘れさせてくれます。

あいさつ

水は、あらゆる生命の根源であり、私たちの暮らしや、農業、工業などの産業活動を支える限りある貴重な資源です。一方、近年では、世界的に渇水、洪水が頻発し、水利用の安定性や安全で良質な水資源の確保が重要な課題となっています。

こうした中、水を私たち共有の財産と位置づけるとともに、国民の皆様に、健全な水循環の重要性についての理解を深めていただくため、毎年八月一日を「水の日」と定め、様々な関連行事が行われています。

この一環として、和歌山県では、中学生を対象に、昭和五十四年から続く「全日本中学生水の作文コンクール」を実施しており、本年は、八一二編の応募をいただきました。

いずれの作品も、「水について考える」というテーマにふさわしく、つい忘れがちな水の大切さ、有り難さについて考えさせられる作品で、水を大切にしようという思いがよく伝わってまいりました。

このたび、入賞作品十八編を作品集にまとめましたので、ご家庭や学校でご活用いただき、水についての関心をさらに高めていただくことを願っています。

最後に、本コンクールに応募された中学生の皆さんと、ご担当いただいた先生方に厚くお礼申し上げます。

平成三十年七月二十三日

和歌山県企画部長　田嶋　久嗣

もくじ

優秀賞

谷川の水から　和歌山県立田辺中学校　二年　上谷　南美　・・・1

周りの水に目を向ける　和歌山県立向陽中学校　二年　小谷　高司　・・・3

みんなで守ろう。みんなの水を。　近畿大学附属和歌山中学校　一年　小西　優斗　・・・5

入選

きらめく川　近畿大学附属和歌山中学校　一年　妹背　榮希　・・・7

制限された水　和歌山県立田辺中学校　二年　家門　美紅　・・・8

〇・〇一パーセントを有効に使うために　和歌山県立向陽中学校　二年　北口　湖子　・・・9

豊かな自然を守るため　和歌山県立桐蔭中学校　一年　古味山　果歩　・・・10

水を守る一員として　和歌山県立田辺中学校　一年　谷本　すばる　・・・11

佳作

生命のバトン　和歌山県立向陽中学校　二年　大池　桜冬　・・・12

伏菟野の山から　和歌山県立田辺中学校　一年　尾﨑　孝健　・・・13

水とともに生きる　近畿大学附属和歌山中学校　二年　神舘　嘉宏　・・・14

生きていくうえで必要なもの　近畿大学附属和歌山中学校　一年　竹中　杏里彩　・・・15

水の怖さと大切さ　田辺市立本宮中学校　三年　西浦　満　・・・16

命と水の大切さ　和歌山県立桐蔭中学校　一年　昇　愛華　・・・17

未来へつながる　和歌山県立田辺中学校　二年　濱口　姫生　・・・18

今と昔の水のあり方の違い　和歌山県立向陽中学校　二年　林　祐樹　・・・19

命を守る水　近畿大学附属和歌山中学校　一年　平松　睦葉　・・・20

水害を体験して　串本町立串本西中学校　二年　深海　六花　・・・21

（掲載順序は五十音順です。）

優　秀　賞

谷川の水から

和歌山県立田辺中学校　二年

上谷（かみたに）　南美（みなみ）

祖父の家の前を流れる谷川。とても自然豊かで、他にはない場所だ。私は小さい頃からこの場所で遊んでいた。例えば、葉っぱを流したり、すいかを冷やしたり。また、かにをつかんだり、滝みたいなところを登ったり……。非常にのどかで、自慢できるとっておきの遊び場である。

今から遡ること、四・五十年。大阪にいた祖母が結婚し、この地に嫁いできた頃の話だ。目の前を流れる谷川、集落を囲む山々。雨が降ったらゴロゴロと流れてくる、大きな石。大阪の大都会で育った祖母にとっては、ありえないことの連続だったという。でも谷川の水の透明度は、大阪では感じられないものだった。見るたびに心を打たれ、感激したそうだ。

しかし、こんな田舎にも開発される時期がやってきた。大した開発ではなかったものの、その開発による影響は少なからずあった。まず、川の水量が減ったことだ。そして、水量が減ったことで元々あった、わさび畑がなくなった。川の水が汚れていることもあった。鮎やうなぎもとれなくなった。

生活用水・飲料水として使っていた、谷川の水が少なくなったこと、時々汚れて使えない日もあったこと。これは非常に困ったことだったそうだ。開発するのは良いことなのだが、水を確保できないことに苦労したそうで、複雑な気持ちだったらしい。

祖父母は今、あの田舎の家を離れ、町に住んでいる。昔のような、水を確保できないような、そんな苦労はなくなった。しかしあのような経験をしたからこそ、祖父母は水には厳しい。それを私たちにも教え、伝えてくれる。特に祖母は、

「ほら、水出しっぱなしにせんの！」

と、よく言う。時々、「うるさいなあ、それぐらい大丈夫やろ。」と思ってしまう。でも祖母の言葉は実際に体験して、でてきている言

葉だ。心に刻んでおくべき、言葉なのだ。祖父母がいてくれるから、私たち家族は「水は重要」の気持ちをいつまでも、忘れずいられる。

そして二〇一六年、記憶に新しい熊本地震が起きた。私はテレビ越しにしか見ていないが、崩れた熊本城が被害の大きさを物語っていた。またたくさんの家屋が倒れ、多くの方々が避難所生活を余儀なくされたという。同時にライフラインも停止したそうだ。そこで困ったのが生活用水、飲料水の確保だった。ただでさえ慣れない生活。その上、水を節約しなければいけない状況は、かなりしんどかったことだろうと、想像がつく。水がないことで体に異変が出た方々もいると聞いた。

この震災を受け、「水の重要さ」を改めて思い知った。祖父の家の前を流れる谷川も、蛇口をひねれば出てくる水も、決して当たり前ではないのだ。

私は祖父母が教えてくれた「水は重要」の気持ちを忘れないでいたい。これからもずっと、あの谷川で遊んでいたいから。それと同時に自然を守る・水を守る活動に参加してみたい。今まで参加したことはないが、これを機に参加してみたいと思った。

そして、これからも「水」を大切にしていく。いつまでも綺麗な水が身の回りにあることを願って。

優　秀　賞

周りの水に目を向ける

和歌山県立向陽中学校　二年

小谷（こたに）　高司（こうし）

小学五年生の春、私は学校の社会見学で、生まれて初めて船に乗った。爽やかな海の匂いに包まれ、気持ちの良い風が体全身を通り抜けていくようなあの感覚は、今でも忘れられない。そして、船から周りの景色を眺めていると、工場がいくつも並んでおり、私はその光景にひどく驚いたことを覚えている。

「こんな海のすぐ近くに工場があって、海が汚れることはないのだろうか」と、私は不安に感じたのだ。ところが、またその先の景色を眺めていると、釣りをしている人達を見つけ、私は笑顔で大きく手を振った覚えもある。きっとその時、私は「魚を釣っているということは海が汚れていないのだな」と思い、ほっとしたのだろう。しかし、本当に海は汚れていなかったのだろうか。

水は、私たちの生活において、「欠かすことのできない存在」である。部活動で体を動かした後の水分補給、一日の疲れを癒やしてくれるお風呂、その他にも掃除や洗濯など、様々な場面で水が必要になる。しかし、水を必要としているのは、もちろん私たち人間だけではない。そのことを忘れずに、水に対する関わり方を改めて考えるべきだと、私は思う。

小学校低学年の頃、私はよく家の近くの用水路でメダカ捕りをしていた。透き通る水の中を泳ぐメダカの群れを追いかけて、毎日日が暮れるまで網を持って走り回っていた。だが、最近その用水路にメダカの姿は見られない。学校の帰り道にふと用水路を見てみると、空き缶やタバコ、ビニール袋などのたくさんのごみだけが流れているのだ。「もうあのメダカ達を見ることはできないのか」と、私はもう諦めかけていたのだが、そんな時、近所に住んでいる人達でその用水路に流れているごみを拾っているのを見かけた。そして、その内の一人の方に、用水路は元々泳ぐことができる程きれいで透き通っていた、ということを教えてもらい、

「誰かがごみを拾ったり掃除をしたりしないと、あの用水路の水は汚れていく一方だから。」と、その人が言っていた言葉が、私の心に刺さった。私は小学生の頃、一度も地域のボランティア活動に参加したことが無かったのだ。

だから私は、水を汚さないために自分ができることを、普段の生活でも意識して実践していくべきだと思った。時間がある時には地域のボランティア活動に積極的に取り組み、家の中では、食べ終わった後の食器をいらない布やティッシュペーパーで拭いてから洗うようにする。「誰かがやってくれる」ではなく、「自分ができることを見つけて進んで取り組む」という気持ちで、そういった事をめんどくさがらずに続けていこうと思う。確かに、浄化槽や下水処理場が私たちの生活排水をきれいな水に変え、川や海を汚さないようにしてくれているが、そこに頼ってばかりで、自分の使いたいように水を使うのは、やはり許されることではないと、私は思うのだ。

私たち人間は、生きるために水を飲み、暮らしていくために必要な洗濯やお風呂などにたくさんの水を使用している。だから、私たちにとって水とは、「欠かすことのできない存在」であるとともに、「当たり前のように関わっている存在」であると、私は思う。そのため、周りの環境に悪影響を与えていること、そしてその環境をきれいにしようと活動してくれている人達に気づけていないことも多いのだ。だから、今一度日々の自分の行動を見つめ直し、水を汚さないために自分ができることに積極的に取り組んでいこうと思う。メダカ達が息苦しい思いをせずに済むように。

優　秀　賞

みんなで守ろう。みんなの水を。

近畿大学附属和歌山中学校　一年

小西（こにし）　優斗（ゆうと）

水は、私たちが生きていくためには、不可欠なものです。まず、飲むため、毎日の食事を作るため、汚れた物をきれいに洗うため、農作物を作るためなど、私たちの毎日の暮らしを支えている大切なものです。この貴重な「水」という資源について、あらためて考えてみようと思います。

昨年の夏、海水から塩ができるのかどうかということについて調べました。夏休みに、福岡市に旅行に行き、近くの海で海水を一リットル取ってきました。いとこも同じ時期に函館市に旅行に行ったので、海水を取ってきてもらいました。取ってきた海水をろ過してふっとうさせ、煮つめて塩ができるのかを実験しました。半信半疑でしたが、塩ができました。日本の北部と南部の海水を実験したので、和歌山市の海水も取ってきて、同じように実験しました。そして、それぞれ出来た塩を比べてみました。海水をふっとうさせている時、函館市と福岡市は無色透明でした。和歌山市の海水は、にごっていました。そして出来た塩は、函館市と福岡市は、真っ白で、和歌山市は、黄色っぽい色でした。なぜ、このように色が違っているのかを考えてみました。海水を取った所の違いは、函館市は、函館湾に面していて、近くに川はありませんでした。福岡市は、福岡湾に面していて、近くに川がありました。和歌山市は和歌浦湾に面していて、近くに川がありました。福岡市と和歌山市は、同じように近くに川があるのにどうしてこんなに塩の色に違いが出るのか考えてみました。福岡市と函館市は、家や工場などで使った汚れた水をきれいにしてから川に流す下水道が、広く普及されていて、和歌山市は、下水道があまり広く普及されていないので、汚れた水が、そのまま川や海に、流されているからだと分かりました。下水道の普及率を調べたところ、函館市は、９０．３パーセント、福岡市は、９９．７パーセント、和歌山市は、とても低く、３９．３パーセン

トでした。

私たちが毎日、飲んだり、使ったりしている水は、川から取りこんで川に流しています。これからも、安心しておいしい水を飲んだり使ったりするためには、私たちが家の中から流す水から気をつけて、川を汚さないことです。例えば料理で出た油汚れを紙などでふきとってから洗うことで、油をそのまま流してしまう事を防げます。また、食器を洗う時は洗剤は、少しにするなど、私たちの身近な生活の中から、意識して小さなことから気を付けて、行動することが川をきれいにすることにつながります。この行動や意識を日本４７都道府県の人々が、そして、世界１９０ヶ国以上の国と地域の人々が、気を付けて出来ると、環境にやさしい、まちづくり、国づくりが実現できると思います。

小学校の時に調べたことが、今回再び貴重な「水」という資源についてさらに深く考えたり調べたりすることが出来ました。次回、和歌山市の海水を取って調べた時には、真っ白な塩であってほしいです。「真っ白な塩にしよう！みんなの力で！」

入選

きらめく川

近畿大学附属和歌山中学校　一年　妹背（いもせ）　榮希（えいき）

僕は川が好きです。川だけでなく、海もプールも、水が動いているのを見るのが好きです。

一番印象に残っているのは、日本で唯一の飛び地である北山村の筏下りです。急流で下半身がビショぬれになった後、流れの緩やかな箇所で、筏から川に足を投げ出し、筏師さんの話を缶のじゃばらジュースを飲みながら、聞いて川を下った光景が今も忘れられません。八月だというのに風が涼しくて、川面がキラキラ光っていて、夢のような世界でした。

次に気に入っているのは、古座川です。ＪＲで古座川を渡る時、窓から真下を見ると川がとても近くに感じられ、水が透明で魚が泳いでいるのを見ることができます。それが楽しみで、そこを通る時は、眠ってしまっても必ず起きるようにしています。

日本は水資源が豊かで、いつでも蛇口から水が出ます。でも世界にはそれがあたり前でない国があることを、僕は三才くらいの時に知りました。「ぼくがラーメンたべてるとき」という絵本です。平和な日本で男の子がラーメンを食べている時、世界中で様々な事が起きている話です。その中に、水をくむことが仕事の少女がいました。当時の僕がどこまで理解していたのかは分かりませんが、

「何で、水道からお水出えへんの？」

と、何度も読んでもらったことは覚えています。その後も「ただいま！マラング村」など、アフリカの奥地で水道がなく、水をくむのが子供の仕事で、そのために学校に行けない子供の話を意識して読みました。

水は生きていくためになくてはならないものです。僕は断水を経験したことがありませんが、日本でも地震などの災害で水道が使えなくなった時に、給水車の前に長い行列ができているのをニュースで見ます。その度に水は大切だと実感します。

では、僕達の使っている水はどこからきているのだろう。この事は小学校で学びました。遠足で「水ときらめき紀の川館」にも行きました。紀の川の上流は奈良県の吉野川で、日本でも有数の多雨地域である大台ヶ原を水源としているので、和歌山市は水に恵まれているそうです。大雨で増水した時は紀の川大堰の水門で調整しています。川は絶え間なく流れているので、茶色ににごってしまっても、数日で元のきれいな川に戻ります。小一の時、大きな流木が流れてきて、六十谷橋の近くに引き上げられていたことがありました。古墳時代の巨大なクスノキらしくて、自転車で見に行きました。その大きさに驚いたし、どうやってこんな大きいものが、と不思議でした。あれほどの物でも流してしまうのだから、人間なんてひとたまりもないと思います。僕達に水の恵みをもたらしてくれる川ですが、怖くもあります。

それでも、僕は川が好きです。車から眺める紀の川はとてもきれいです。太陽が反射してきらめき、水鳥が小さな島のような所でひしめきあって休憩しています。僕の家から歩いて五分ほどくらいなので、気分転換に河川敷の公園に行くこともあります。僕が将来、和歌山を離れてどんなところに住んでいても、透き通った北山川や古座川、毎日見ている紀の川のことを時々思い出すと思います。五十年後も百年後も、今と変わらない川のままであって欲しいです。その為には、川を管理してくれている人達に任せるだけでなく、僕達もきれいに保てるよう心掛けなければならないと思います。

僕は、日本の川を自慢に思います。

入選

制限された水

和歌山県立田辺中学校　二年　家門（かもん）　美紅（みく）

「湯張りが終わりました。」電気温水器のメインリモコンから流れてくる機械音声。この声を聞くと私は、一日の疲れを取って癒してくれるお風呂に入る。

そんなある日、突然、

「ピー。ピー。ピー。」

と聞きなれない音が耳に響いた。その音は、何が原因で鳴ったのかがわからなかったので説明書を読んでみることにした。父と母と弟で力を合わせたけれど、解決できなかったので、水道業者さんに電話をして家に来て修理をしてもらうことになった。電話をかけた次の日。早速、水道業者さんが見ると、

「一日で直すのは、少し時間が足りないな。今晩は早めにお風呂から出るようにして下さい。もしかすると、途中でなくなる可能性があります。」

家族の皆はそれを聞いた瞬間、空気が固まった。お風呂のお湯が出なくなる事を考えてもみたことがなかったからだ。業者さんの話によると、壊れた原因はお湯を沸かす電熱線らしい。湯を沸かす途中で故障したらしく、沸いているお湯の量もメインリモコンの画面からするとおそらく半分の量だと推測できた。

夜になり、入浴する事になった。できるだけ一人の入浴時間を短縮するようにした。一人目は、弟だ。湯を出してまもなく、

「お湯が少なくなりました。」

という機械音声が流れた。

「ええ。」

弟の驚きのかくせない声が聞こえてきた。全員が入れるかどうか心配になってきたので工夫をする事にした。普段シャワーを出して洗顔しているのを洗面器にお湯を入れて洗顔をしたり必要以上にシャンプーやリンスを使ったりしないようにした。洗剤を使う量が多いと使う水量も増えるからだ。そして母が入浴し、私の番になった。洗う時以外はすぐ湯を止めた。そこから、父が入浴し、全員入浴することができたのでほっとした。普段ここまで気をつけていなかったので、お水の使えるありがたさが、この経験ですごくわかった。

この経験とよく似ているのがダムだと思った。似ているところは、取水制限という取り組みである。ダムの取水制限は、異常な少雨や涸渇などによってダムなどの貯水量が減少した時に河川から取水する量を減らすことだ。ダムが無ければ蛇口をひねっても水は出ない。日本は雨の多い国で、年平均の降水量は世界の平均の約二倍である。けれども、その雨水の全部がダムになっていないらしい。その理由として、日本の川は勾配が急で、雨が降ってもすぐに海に流れてしまうからだ。雨はたくさん降っているのにそれを有効利用できないことがすごく残念だと思う。そのうえ、ここ約百年で降水量が減ってきている。自然に任せているだけでは水は確保できない状態でそれをダムがコントロールしているらしい。水不足が起きると大変なことになる。お風呂に入れない、洗濯できない、トイレもできないなどといった生活の不便さがある。また、農業や工業、商業などのあらゆる活動に影響し、日本経済全体にも影響が及ぶ可能性があるといわれている。このような事が起こらないように、川と川の間で水を融通しあったり、ダムの特徴に合わせて放流量をコントロールしたりしているらしい。

このように、私達が過ごす生活の中で、水は必要である。水が不足しないように私達人間の一人一人が節水することによって水は保たれるのである。だから、「節水」この言葉を大事にして私は生活しようと思う。

入選

○．○一パーセントを有効に使うために

和歌山県立向陽中学校　二年　北口（きたぐち）　湖子（ここ）

「雨なんて降らなければいいのに」

思わず私はそう口にしていた。

ある年の秋頃、大型台風の影響で大量の雨が降り、全国各地で被害が相次いだ。また、私の家の近くの山や川でも、土砂崩れや洪水が発生していた。土砂の回収作業にはたくさんの時間と労力を費やす。洪水により浸水が起これば、さらに大変だ。このようにして雨は時に私たちの生活に被害をもたらす。だから、雨が降るたびに私はいつも降らなければいいのにと思っていた。

しかし、ある出来事をきっかけに、雨の大切さ、水の大切さについて気付くことができたのだ。

小学四年生の夏、太陽が照りつけ、燃えるような暑さが続いていた。そんなある日、私達家族は祖父母の家に来ていた。祖父母はいつものように畑で農作業をしていたので、私と弟は畑の端に座って、黙々と作業する祖父母の姿を眺めていた。永遠と続く蝉の鳴き声が、より一層夏の暑さに拍車をかける。作業が終わったのか、休憩しに来た祖母の額には汗がにじんでいた。私は祖母に、「何を作っているの？」と尋ねた。すると、「こっちはトマトであっちはナスだよ。でも最近はずっと暑いからねぇ。美味しくできてるといいんだけど。たまには雨も降ってくれないと困るよ。」と答えた。そのとき、私は思わず「どうして雨が降ってほしいの！？」と聞いていた。祖母は、「だって雨が降ってくれないと十分に栄養が行き届かないでしょ。恵みの雨っていう通り作物にとって雨は、必要不可欠なんだよ。」と教えてくれた。

このときの衝撃は今でも覚えている。私がずっと降ってほしくないと思っていた雨に対して、祖母は降ってほしいと言ったからだ。

でも祖母の話を聞いて、私は雨に対する思いが変わった。それまでは雨が降ると、「外遊びできないし、傘は邪魔になるし、いいことなんてひとつもないや。」と思っていた。でもよく考えてみると、雨が降らなければ作物や木は育たないし、木が育たなければ森はないし、森がなければ川はなくて、川がなければ飲み水もないことに気が付いた。その他にも色々なことに水は必要で、水がなければ私達の生活は成り立っていないのだ。

しかし今、海や川の水が汚染され、水質汚染が深刻な環境問題となっている。私は、その原因はすべて私達人間にあると考えた。海や川にごみをポイ捨てしたり、生活排水がそのまま川へ流れ出ているといった光景を目にすることがあるからだ。また、調べてみても、水質汚染の原因における約六十パーセントが生活排水だという。水なしでは生きていけない私達が、水質汚染を進行させているというのはあってはならない話だと思った。私達が使用できる水の量は限られている。地球の半分以上は海で覆われており、水の惑星ともいわれるが、実際私達が使えるのは地球上に存在する水の約○．○一パーセントだそうだ。だからこそ、限りある水を汚さず大切にしていかなければならない。

そのために、私はまず自分達でできることからしていこうと思う。たとえば、食事後に食器や調理用具についた汚れを拭きとってから洗う、お風呂のお湯を洗濯や掃除に使う、環境に悪くない石鹸を使う、などだ。

自分一人がやったところで世界は何も変わらないかもしれない。でも周りの人とも協力し、それをずっと続けていけば、いつかきっと日本はきれいな水で満たされるだろう。きれいで安全な水を後世に伝えていくために、まずは私達から取り組んでいくべきではないだろうか。どれも簡単にできることだから、限られた水、○．○一パーセントを有効に使うために、少しずつでも取り組んでいこうと思う。そして、地球上に溢れる水が、美しく、限りないものになってほしい。

入選

豊かな自然を守るため

和歌山県立桐蔭中学校　一年　古味山（こみやま）　果歩（かほ）

「わあっ！すごい。海だ！」

太陽の光を反射して、水面がキラキラと輝いている。この日、私は学校のイベントで、加太の海の磯観察に来ていた。豊かな和歌山の自然の中で行われる磯観察を、私はとても楽しみにしていた。

海の中に入り、石のうらや岩のかげなどを注意して見てみると、たくさんの生物が見つかった。岩にへばりついているクロフジツボ、老人の背に似ていることからジイガセと呼ばれることもあるヒザラガイ、砂や岩の上をすばやく移動するスナガニ…。どれも見たことがない生物ばかりで、私はとても感動し、私たちの子孫にも、このすばらしい加太の自然を味わってほしいと思った。

しかし現在、日本では、水質汚染が問題となっている。このままでは、生物たちが海に住めなくなってしまう。原因はなんだろう。気になったので、インターネットを使って調べてみた。私は、工場などから出る排水が原因だと思っていたが、そのサイトには、私たちが日々だしている、生活排水が原因で水が汚れているということが書いてあった。このままなにもしなければ、水が汚れてしまい、魚や水辺にすんでいる生物が生活できなくなってしまう。それだけはなんとか阻止したい。少しでもいい、私にもできることは、なにかないのだろうか。

まずは、生活排水の対策方法を考えることから始めた。母に聞いてみたり、インターネットで調べたりすると、三つの対策方法がでてきた。一つ目の方法は、料理くずや食べ残しを水といっしょに流さないというものだ。私は、たまに食器洗いを手伝うことがある。そのとき、料理くずや食べ残しを、そのまま流してしまうことがあり、気をつけなければいけないと思った。二つ目の方法は、洗剤を正しくはかって使うというものだ。私は、手を洗うときに、ハンドソープをつけすぎてしまうくせがある。母に注意されたときは、特に気にしていなかった。しかし、今改めて考えてみると、情けない気持ちになった。三つ目の方法は、米のとぎじるを花の水やりに使うというものだ。私は、いつもとぎじるを排水口に流してしまっていた。母は水やりに使うことが多いそうで、自分も、見習わなければいけないと思った。

この三つの方法はとても簡単だ。誰にでもできる。このような小さなことでも、多くの人が協力して行動することで、たくさんの生物を助けることができるのだ。

水は、生物が生きていく上でなくてはならないものだ。全ての生物が必要としている水を、人間の都合だけで汚してしまってもいいのだろうか。私は、たとえどんな理由があっても、水を汚すのはいけないことだと思う。美しく、豊かな加太の自然を未来につなぎたい。私たちの子孫たちにも、私が感じた、あの感動を、味わってほしい。生活での水の使い方を見直し、生活排水を減らすことで、魚や水辺にすんでいる生物を守ることにつながる。今の私の思いをたくさんの人に伝えたいと思う。

入選

水を守る一員として

和歌山県立田辺中学校　一年　谷本（たにもと）　すばる

「人の役に立てて、喜んでもらえたらうれしいよ。」父は笑顔で自分の仕事について語った。私の父は水道施設業の仕事に携わっており、耐震管布設や緊急遮断弁設置工事の施工のほか田辺市災害協定に基づき災害発生時には水道施設の早期復旧を図るために災害現場で応急復旧作業に従事する任務を担っている。平成二十三年台風十二号紀伊半島大水害が発生し市内約二千五百戸が断水した。父は甚大な被害を受けた伏菟野地区の復旧に向かったが県道は決壊し、台風が去った後も寸断された道路のいたる所で土砂が散乱していた。車から降り、仮設配管に必要な材料を担いで現場まで歩いて何回も往復するしかなかった。地元の人から安全なルートを教わったそうだが私なら崩れた道を歩くなんて足がすくんでしまう。「怖くなかったん。」「うん。伏菟野の人たちが朝晩寒くなる季節までにあったかいお風呂に入れるようにしてあげたかったんや。それだけを考えてた。」父は土木関係や行政機関や地元の皆さんと共に力を合わせて困難に立ち向かった。私は「水を守る一員」である父を誇らしく思った。

災害により水道管が破損すると私たちはたちまち窮地に陥ってしまう。田辺市は水を守るため様々な応急対策を備えており、ライフラインが遮断されて飲料水の確保ができないときにプールの水を活性炭とろ過装置で浄化して飲料水として避難者に提供することができる造水機を市内の学校に八基配備している。一基当たりの処理能力は毎時一・五トンで一日に約五千人に飲料水を提供できるすばらしい技術と工夫が備わっていて感動した。

私は正直に言うと初めは、「プールの水を飲むなんてとんでもない。」と思っていた。しかし田辺市水道事業所の方々の努力やこのような災害対策設備を知って、コップ一杯の水のありがたさがわかり、今までの自分を心から恥ずかしく思った。水を守ってくれている皆さんに感謝をし、これからは私も日頃から水を大切にして節水を心がけ、上手な水の使い方を身に付けて災害時にいかそうと思った。

そこで家族と節水方法を話し合った。母は食器を洗うとき洗剤の不要なスポンジを使用したり野菜のゆで汁を食器洗いに利用すること、私は洗顔や歯磨きのときに洗面器やコップに水をためる、父は蛇口に節水コマを取り付けたりバルブを調整して流量を少なくする方法をそれぞれ実行することにした。さらに断水を想定した訓練を家庭内で体験してみた結果、水を使わないで生活するアイデアや知恵をいくつか編み出すことができた。例えば食事の都度に湯を使ってしまうカップ麺よりレトルト食品や缶詰なら湯を再利用できることに気づいたり、ウェットタオルや歯磨きシートを備蓄して衛生面に配慮するなど水不足に対抗できる有効な手段を次々に発見した。

このように日頃から節水の工夫や努力をする習慣が災害に負けず水のない生活をしのぐ第一歩になると思う。平時にできないことは災害時にはできない。各地で地震や災害がおきる度「万一の備えが必要だ。」と慌てふためくが、しばらく時がたてば危機感も薄れて「自分の住む地域は大丈夫だろう。」と安易に考えがちになる点を反省しよう。間に合わせで覚えた付け焼き刃の知識では災害時の水不足の大混乱を乗りこえられないし、行政機関の応急給水対策や備蓄に任せっきりで安心してしまうのも危険だと思う。日頃から水を大切にして節水する「心の備え」を積み重ねることで私たちはやっと浄水技術や管路の耐震化に追いつくことができるだろう。

生きていくうえで水は欠かせない。災害だけでなく猛暑や少雨による水不足や大寒波の影響による断水など身近な問題にも目を向け、さあ今、「水を守る一員」として私たちもやれることから一歩をふみ出そう。

佳作

生命のバトン

和歌山県立向陽中学校　二年　大池（おおいけ）　桜冬（おと）

私は、毎年ゴールデンウィークになると、古座川にある祖母の兄弟の家に行く。そこは緑に囲まれていて、川の水の流れる音だけが山全体に響きわたる、とても静かな場所だ。私はそこに行くと必ずすることがある。川に行き、生物を観察したり、釣りをしたりすることだ。その川は、山から流れ出た天然の水、それだけでできたものである。川の水は澄んでいて、日の光を反射し、キラキラと輝いている。これらに、自然の恵み、神秘を感じる。川岸では、カワトンボやサワガニが元気に動きまわり、水中では、清らかな水の中をカワムツが優雅に泳いでいる。そして、川辺ではシカがおいしそうに川の水を飲んでいる。そんな光景を見ていると、私はいつもうっとりしてしまう。そして、和歌山の自宅へもどってくる。

私の家のすぐ近くには、紀ノ川が流れている。紀ノ川は、古座川の川とは全く違い、ゴミは浮いていて、ところどころには家庭から出た汚水なども見られた。その時、節水や環境保全について、改めて考えさせられた。

水と私たち生き物の暮らしは、親密につながっている。水が無ければ、私たちは生きることができない。今、私たちの身の周りは、水であふれているといっても過言ではない。蛇口をひねれば、水道水がでてきて、すぐそばには川が流れている。しかし、そんな生活がいつまでも続くとは限らない。雨が降らなくなれば、水が無くなる。そうなれば土地は干上がり、人々は飢える。川や海の水が汚れれば、そこにすむ生き物はいなくなり、私たちが飲める水の量は激減する。私たちのためにも、自然、そしてあの澄みきった川にすむ生き物たちのためにも美しい水を保っていかなければならない。

今の日本では、富士山や、日本アルプスから流れでた水が天然水として売られている。「天然水」がたくさん売られているということは、日本には、未だたくさんのきれいな水があるということだ。小学二年生の私が古座川に行ったときは、何も思わなかった。だが、「水」や「環境」について深く理解できるようになった今、きれいな水のある場所、「自然」を増やし、守らないといけないと思う。

その自然を守るために私たちにできることはないだろうか。私たちは、毎日顔を洗い、歯をみがき、水を飲み、洗濯をし、お風呂に入る。一日を通して水を使っているのだ。現代の日本を生きる人々にとって、「水」というものは、ありふれたものであり、かけがえのない存在だ。しかし、「水」も量に限りがあり、決して汚してはならない資源である。食器についた油汚れを、紙で拭いてから洗ってみる、シャワーをこまめに止めてみる、歯みがきではコップをつかってみる、そんな小さな事でもやるとやらないとでは大違いである。自治体や県にまかせているのではなく、自ら進んで節水などに取り組むことが大切だと私は思う。また、自分だけではなく、周りの人にも注意を促すことで、よりきれいな自然を保つことができるだろう。

私は、あの古座川の美しい自然や、澄みきった川、そこでいきいきと生活する生き物を見てとても感動した。そのすばらしい自然、「水」という存在を、次の世代、そのまた次の世代へとつなげていきたい。それは、この日本、世界を生きる私たちにとって大切なことであり、必要不可欠なものだと思う。

佳作

伏菟野の山から

和歌山県立田辺中学校　一年　尾﨑（おざき）　孝健（たかとし）

「わあ、すごい。」

きれいな川。立派な木。おいしげった草。

ここは、和歌山県田辺市の伏菟野。大半が山である。今日、ぼくたちは、水源地探検で伏菟野にやってきたのだ。

この探検に行く前、ぼくは「毎日当たり前に飲んでいる水はどこからきているんやろ。」と疑問を持っていた。その疑問が解決すると思うと、とても楽しみだ。

伏菟野小学校で、ゲストティーチャーの方と合流してから、山での探検がスタートした。

山に入ると、すぐに川が現れた。その川にそって、山道を進んでいく。山道のサイドには、たくさんの落ち葉があった。

そこで、ゲストティーチャーの方が、「この落ち葉は、雨が降ったとき、クッションみたいになって、スポンジのように、水をためておけるんや。」と、話してくれた。

だから、ぼくは「逆に木がなかったら、水を吸収してくれなくて、水が一気に流れ、危ないな」と、木のありがたみを知った。

そして、今日一番の目的「水はどこから」だ。

ぼくたちが歩いていると、道がぬれている部分があった。雨もふっていないのに。よく見てみると、岩から水滴がポタポタたれていた。「あっ、そうか」ぼくは、とてもスカッとした。疑問が解決したからだ。

ゲストティーチャーもぼくたちが気づいたのをさとったかのように、口を開いた。

「みんながいつも使っている水は、何百年も前に降った雨が、地面にしみこんでいって、こういう風にちょっとずつ、ちょっとずつ水滴が出されていって、一滴一滴が合わさって小川になり、その小川と小川が合流し川になるんやで。」

と、とても丁ねいに説明して下さった。

これで、今日の水源地探検も終わりだ。

今日の探検を通して、ぼくが大切にしたい・守っていきたいものがある。

それは、水はもちろんだが、ぼくが最も守りたいものは「山」だ。

山があることで、きれいな水を作り出してくれる。

しかし、その山が弱いと、強い雨、風にたえられず、土砂災害など、災害が起こってしまう。

そうならないために、山を丈夫にするのは、ぼくたち日本人の役目だとぼくは思う。山が多い日本だからこそ、木を丈夫にし、守っていくことが、ぼくたちの使命でもあるのだ。

このように、人と木と水は、関わり合っている。人が水や木を守るというのは、結局は、自分が安心して、暮らすことができるということなのだ。

そして、今ある自然のめぐみに感謝し、これからも、安心して暮らすことのできるよう水を汚したり、山にゴミを捨てたりはしないように心がけたい。

もし、だれかが山にごみを捨てていたら、ひろってあげたい。

そういう良い行動が、みんなに広まっていけば、この世の中はもっと良い世の中になると思う。そして、こういう良い活動の中心になっていきたい。

それには、とても行動力が必要とされる。

その行動力をこれからの生活でつけていきたい。

今わかった。

これから、ぼくたちが清潔な水を飲めるかは「日本人の思いやりの心」にかかっているのだと。

佳作

水とともに生きる

近畿大学附属和歌山中学校　二年　神舘（こうだて）　嘉宏（よしひろ）

僕の住む和歌山市は、紀ノ川が流れており、日本で最も降水量が多いとされる大台ケ原を水源とし、一年中安定して豊富な水が流れているため、水不足になることはほぼなく、安心して水を使うことができています。

最近はあまりありませんが、十年以上前には、紀の川の水が少なくなって給水制限が出たことがあると聞きました。普段は、水は豊富にあると思っていますが、降水量が少なかったり、自然災害で水が手に入らなくなることもあります。そこで、普段から節水に心がけたり、いざという時のために、保存水を用意することが重要だと思います。

紀の川は、今では想像することもできませんが、昔は堤防がなく、大雨が降るとよく洪水が起こっていたそうです。今ではしっかりした堤防や堰がつくられ、ほとんど洪水が起こらないようになっています。それでも、いざという時のために、洪水に対しての心構えをする必要があると思います。例えば、大雨の時は災害情報に注意深く耳を傾けたり、いざという時は一刻も早く避難する心構えが重要だと思います。

家庭では、一人当たり一日に二百リットル以上の水を使用し、その内トイレとお風呂で半分以上を占めていると言われています。トイレの水を減らすのは難しいですが、お風呂に入るときシャワーを出しっぱなしにしないようにしたり、少しでも節水を心掛けていきたいと思います。

日本は水に恵まれていますが、世界では水不足が深刻な国が多く、濁った水が飲料水であるような国もあります。今後人口が増加し世界全体では水不足が更に進むでしょう。日本でも今後そうならないとは限りません。少しでも節水に心がけていきたいと思います。

僕の家では、飲料水としては水道水を使い、洗濯や庭の散水用としては、井戸水を使っています。僕の家のある地域は、山や海に近く、山沿いでは、畑も多く我が家でも家庭菜園で井戸水を使って野菜を作っています。

一方、海に目をやると、地下水や雨水だけでなく、汚れた生活排水が流されています。人が快適に暮らしている一方で、自然の生態系を壊していることになります。洗剤の使い過ぎや、食べ残しをそのまま流さないようにすることなど、個人個人が心掛けていくことが大切だと思います。

人間にとって、不可欠な水を大切に使い、環境に負荷をかけないように努めるとともに、僕自身は、体験したこともありませんが、津波や洪水、川の氾濫などは、繰り返し起こるものだということを認識して、それに備えて生活していこうと思います。そして姿を変える水についてよく学び、よりよく生活に取り入れていきたいと思います。

佳作

生きていくうえで必要なもの

近畿大学附属和歌山中学校　一年　竹中（たけなか）　杏里彩（ありさ）

普段から私たちが当たり前のように使っている水だが、いざそれがなくなるとどうなるのか考えてみた。

私の兄は登山部に所属しているが、登山の前には必ず水を三リットル準備していく。水だけで荷物が増えるので、水ぐらい山でくめばいいと思うのだが、水くみ場の無い山もあると言う。その上、水を買うとなると一リットル五百円もするそうだ。それを聞いて私はびっくりした。コンビニではジュースより安いので、手軽に買えると思っていた。

山では水分補給はもちろんのこと、ご飯を研いだり炊く時に使う他、けがをしたときに傷口を洗うといった洗浄水にも使うそうだ。なので節約したり、すべての使用量の計算をしなければ、行程に支障が出たり命に関わることもあるという。水がそんなに貴重なものだとは思ってもいなかった。

どうして山小屋の水がそんなにも高いのかを兄に聞いてみると、標高の高い山では湧き水がなく雨をためて水として使っているが、雨水だけでは足りないため、下の町からヘリコプターで、水を運びあげているそうだ。そのため、山での水はとても貴重で値段が高くなっている。それを聞いて私は、水を大切に使わなければいけないと改めて感じた。

考えてみると災害時に一番に供給されているのは水だと思う。水をもらうために行列が出来ている映像を見たことがある。供給される水の量も限られているので、節約が必要である。私が知っている節約方法は、サランラップを皿の上にひき、食器を洗わずに済むようにしたり、洗たくをした水でトイレを流したりすることだ。

人間は食べるものがなくても、水さえあれば二～三か月生きることができるそうだ。しかし、水がなく食べるものだけでは一～二週間で死んでしまうという。人間の体は七十パーセントが水で出来ているので、生きていく上で絶対に必要なものである。

普段何気なく使っている水をどのように節約できるかを考えてみた。

まずお風呂の時にシャワーをこまめに止めたり、お湯を少なめに張る。また、残り湯を洗たくで使ったりする。食器を洗う時には油汚れは洗う前に拭き取ってから洗ったり、つけおきをしておくことで少しでも節約できると思う。

水は人間だけでのものなのだろうか。植物が成長するには水が必要であり、動物・昆虫・魚などすべての生物が生きていく上で大切なものである。私達人間がむだ遣いをしたり、水を汚染してしまったりすることで、生物に悪影響が出てしまうと私は考える。

今回改めて水について考えてみると、水はなくてはならないものであり、大切にしなくてはならないと思った。私一人が水を大切にするのではなく、もっとたくさんの人がこのような意識をもち、生活してほしいと思う。

佳作

水の怖さと大切さ

田辺市立本宮中学校　三年　西浦（にしうら）　満（みちる）

水。みなさんにとってそれは、どういう存在ですか。私は、水と聞いて一番に考えるのは、飲み水です。のどがカラカラにかわいたとき、水を飲むとのどがうるおうだけでなく、体が生き返ったような気がします。私にとって水とは、生活にかかせず、とても大切なもの、けれど、私には自分の身近にあって、あたりまえのものであります。

のどがかわけば、水道の蛇口をひねるとおいしい水が出てきます。汗をかいて、お風呂に入ると、たくさんの水が私をきれいにし、温めてくれます。服やご飯を食べた後の食器の汚れも水がきれいさっぱり洗い流してくれます。夏になれば、みんなで川へ行き、私たちをすずませてくれます。

このように、水は生活にかかせませんが、私はあまり、水の大切さやどれだけ水がすごいか、私たちに役立っているか、よく知りませんでした。

そんな私が、水への考えが変わったのは、私が、小学一年生の終わりの方に起きた、東日本大震災の映像をテレビで見たときでした。私は、いつものように朝、起きて、日曜日の朝にやっているテレビをつけると、私が見たかった番組はどのチャンネルに変えてもやってなく、代わりに海がうつっていました。しかも、その海にはバラバラになった家や車、木材などがういていて、海の中に立っているはずがない、建物の屋上や、電信柱の上のほうが見えました。また、ヘリコプターが飛んでいる音、そして、そのヘリコプターの中からその景色を伝えている男の人の声が聞こえてきました。最初は、見たい番組が見れず、少し怒っていた私だったけれど、その映像をしっかり見たとき、何か、とても怖かったです。自分がその映像の中にいるわけじゃないけれど、ただ、今まで感じたことがない、おばけを怖いと感じるのとは、また違った恐怖を感じました。そのとき、水というのは怖いものでもあるのだと初めて知りました。

もう一つ、水に対する考えが大きく変わった出来事があります。それは、私が小学二年生の時に起きた、台風十二号、紀伊半島豪雨です。私は最初、正直、雨で警報が出て学校が休みになって嬉しかったです、けれど、今回の休みはいつもと違い、とても長く、大変で、たいくつでした。最初は、すぐ、雨なんて通りすぎるだろう、休みになってラッキーだなと思っていました。けれど、何日間も雨は降り続け、電気がつかなくなり、土砂や倒れた木で道がふさがり、川が氾濫し、風でいろいろなものが吹き飛ばされ、久しぶりに家の外に出てみると、そこには見たこともない景色でした。私の家は、無事でしたが、友達の家やたくさんの人の家やお店が川につかってしまいました。

また、何日間も停電して、蛇口をひねっても水は出てこず、汗をかいても、服が汚れても、風呂に入ることも洗濯機を回すこともできませんでした。夜は真っ暗で、ろうそくや懐中電灯をつけました。ご飯も水がなければ、つくれるものも少なく、買ってきたりしました。

私はこのとき、水がなければ本当に何もできないんだと思い知りました。水以外のものがそろっているのに、水だけがないだけで何もできないもどかしさを感じました。私は台風十二号で水の怖さ大切さを思い知りました。

水。それは、あたりまえにそこにあるようで、そうではない、人にとってかかせないもの。人に幸せをもたらすものであり、不幸をもたらすもの。私にとって水は、自分がもっと大切にしないといけないものです。

佳作

命と水の大切さ

和歌山県立桐蔭中学校　一年　昇（のぼり）　愛華（まなか）

「カダヤシ」。

私がこの魚の名前を知ったのは、六年生になって間もないころでした。担任の先生が用水路で捕まえてきた十四匹のメダカによく似た魚の名前を調べていると、この魚だということが分かりました。もっとよく調べてみると、「カダヤシとは、日本脳炎などの病気を広める蚊を減らすために外国から輸入されました。しかし蚊は減らず、カダヤシはメダカを食べるようになり、生態系のバランスが崩れてしまいました。そこで、国がカダヤシを特定外来生物に指定し、飼育、運搬、放流、譲渡を禁止し、違反者には懲役一年または百万円以下の罰金という刑が科せられる、という法律をつくりました。」などと書かれている資料を見つけました。（人間の勝手で連れてこられたのにも関わらず、見つけたら殺さなければならない。こんなにもかわいそうなことがあるのだろうか。）私はこれを見て、衝撃を受けました。だから何とかして十四のカダヤシたちの命を救いたかったので、どんな方法があるのかを必死で調べました。すると「国の環境省というところに申請書を出して、許可が下りると飼育することが出来る」ということがわかりました。実際に提出しましたが、捕獲をする前に申請書を出さなければならず、許可が下りませんでした。だから殺処分ということになり、カダヤシにとって一番幸せで命を決して無駄にすることのない方法を話し合い、ドンコという生き物にカダヤシを食べさせて、命をドンコにつなぐことになりました。私はカダヤシたちの命を救いたかったけれど、国のルールである法律には従わなければならないので、命をつなぐ時には涙が出そうでした。そしてこの複雑な思いを今までの経緯とともに学習発表会や参観で多くの人に伝えました。

このことから、「なぜカダヤシが増えたのか」という疑問が出てきたので調べていくと「河川が人間によって汚くなっているから」という結論になりました。それに、「河川の汚れの役七割は生活排水だと思われる」ということなどが書かれている資料もありました。生活排水とは、人間が生活をするうえで排出される汚水のことです。つまり、人間がポイ捨てなどをして河川を汚し、生態系のバランスを崩して生き物が住みにくい環境にしているのです。今の状態が続くと、日本に元から住んでいたメダカなどの在来種を絶滅させることにもつながります。このひどい現状を知ってから、少しでも川をきれいにすることは出来ないのか、と考えて私達にとって一番身近にある市堀川という川のことを主に調べ、対策を考えて実行しました。そして、清掃活動や水質調査の結果などを伝えるために、川を実際に歩いて回る「歩く教室」などのイベントを行い、市堀川の未来などについて語り合う「水辺協議会」にも参加して、川のことを知ってもらうため、命や水を大切にしてもらうため、学校外でもたくさん活動しました。

これは私が六年生の時に一年間を通してやった「わかやま創造科」の授業です。私もこの授業をする前まではあまり「水」を意識せずに無駄遣いなどをしていましたが、色々な活動を通じて、やはり水は限りある資源だから大切にしなければならないな、と改めて感じました。それから水が汚くなると私たちを含め数多くの生き物たちが困るので、今あるきれいな水を守っていかないといけない、とも思いました。

私はこのことをきっかけに、自由研究では他の川のこともたくさん調べて、自分にできることを考えて実行していきたいです。そして、今まで私達が行った活動によってたくさんの人が水や命を大切にしてくれることを望み、他の活動もしていきたいと思います。みなさんも生き物のため、そして自分達のためにも「水」を大切にしていきましょう！

佳作

未来へつながる

和歌山県立田辺中学校　二年　濱口（はまぐち）　姫生（ひなり）

私のひいおじいちゃんとひいおばあちゃんの家は和歌山県でも山間部ののどかな村にあります。たくさんの木々や鳥たちに囲まれた自然豊かなところです。畑では四季の野菜を育てていて、私は水々しいその野菜が大好きです。私が行ったときには、畑に行って野菜の収穫を手伝います。穫れたての野菜は「せど」という場所で洗い、泥を落とします。私がせどで野菜を洗っていると母に

「そんなにたくさんの水を使ったら、あかんで。」

と言われました。

「ここの水は山の水を使っていて、無料やのになんであかんの。」

と私が聞くと母は説明してくれました。母によると、せどはもちろん、料理、洗濯、畑で使われている水まで山のわき水を浄化し、タンクに貯めた水を使っているそうです。タンクの水は十軒ほどの家で使っていて、当番でタンクの掃除も行います。だから一軒の家が水を使いすぎるとタンクの水が少なくなり、他の家が十分に使えなくなります。また、雨が何日も降らないと、山のわき水が少なくなってしまいます。そのため、水の無駄使いはいけないのです。街中では蛇口をひねればいくらでも水が出ます。タンクの残りの水の量を気にすることなく水を使えます。もし、タンクの水がなくなったら、想像してみると私だととても不安な気持ちになると思います。お風呂に入る、ご飯を食べる、日常生活には全て水が関係していて、水が欠けると何もできないんだと気付き、改めて限りある資源である「水」の大切さを感じました。

節水しないといけない、水を大切にしないと、とは思いますが具体的に考えたことはありませんでした。そこで今日からでもできる節水について考えてみました。お風呂の残り湯を洗濯に使うこと、歯みがきのときコップを使うこと、食器を洗うときにこまめに水をとめることです。私には大きなことはできません。しかし、このような小さなことならできます。一つ一つは些細なことでも継続していくと大きな成果につながると思います。

今、地球温暖化が問題となっています。このまま気温が上昇すると、日照りが続き、何日も雨が降らない日がくるかもしれません。そうなると、国や都道府県から一人が使える水の量に制限がかけられることも考えられます。私はそうなってから慌てて節水に取り組んでは遅いと思います。

地球という大きな大きなタンクが空にならないように、普段から意識して生活していくことが大切です。

私はひいおじいちゃんのところで体験したことで、今まで意識せずに使っていた、とても身近な存在である水について考えさせられました。いつまでもおいしい、水々しい野菜を食べたい、ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃんが教えてくれたように、私も子ども、孫、ひ孫へと水の大切さについて伝えていきたいと思いました。

佳作

今と昔の水のあり方の違い

和歌山県立向陽中学校　二年　林（はやし）　祐樹（ゆうき）

いつも田んぼや小川をみると、幼い頃のあの景色が思い浮かぶ。僕がまだ幼稚園に行っていた、四才から六才ごろの記憶だ。毎日、幼稚園から帰ってくるとすぐに家の近くの田んぼや小川に近所の友達と遊びに行っていた。その田んぼや小川にいる、ドジョウやメダカ、オタマジャクシをとるためだ。そこの近くを歩くたびに「パシャパシャッ」と動くぐらいの生き物がいた。その頃の僕たちにとって、とても楽しく、生き物とふれあうことができる時間だった。

僕は今でも、夏休みになると、その田んぼや小川にメダカやドジョウをとりにいく。一年前の夏休みにも数年ぶりにそこを訪れた。最近はめったに通らず、幼い頃を思い出した。しかし、そこにいたはずのメダカやドジョウが激減していたのだ。特にメダカは大幅に数を減らしていた。あの小さい頃に夢中になってしていたことができなくなったのだ。

なぜ、たった三、四年程で、こんなにも環境が大きく変化してしまったのか。それは、近くの田んぼが住宅地へと変わってしまったからだと僕は思う。小さい頃は、一面田んぼで、家はポツンポツンとしか建っていなかったのだが、もう今では宅地化が進み、田んぼの数も激減した。この三、四年で大きく変化した田んぼの減少と住宅の増加が田んぼの環境を変え、生き物が減ったのだと思った。

メダカは、水のきれいな場所に住んでいることがほとんどである。前までは、メダカが多い、つまり水質がきれいだった。しかし、今ではメダカが激減し、水質が悪くなってきたともいうこともできる。住宅地の増加により、水質が悪くなり、メダカやドジョウが激減したと考えられる。

このことを祖母に話してみた。すると、祖母は、

「昔はもっと今より水がきれいだった。メダカは用水路でもどこでもいたし、とにかく水が透き通っていた。」

と話してくれた。僕の祖母は昔から山のふもとに住んでいて、周りは木も多い。水も今でも十分きれいだと思ったが、もっときれいで、生き物もたくさんいたらしい。僕の家の周りのようではなく、住宅も昔から変わっていない。それなら、生活のしかたとも生き物と関係している、と思った。

どう違うのか、と思い、昔の生活を図書館に調べに行った。すると、蛇口などがなかった昔は川を冷蔵庫として使ったり、飲み水にも使っていたそうだった。それに対して今は蛇口をひねれば水が出てき、汚れたものはそのまま流したりしている。今も昔も水は大切なもの、と思っていても、違うのは「ありがたさ」だと僕は思う。昔は、水はなくてはならないもので、冷蔵庫として使うなど、有効に使っていた。もちろん、今でも水はなくてはならない存在だが、昔ほど思っていないだろう。水が近くにあり、飲もうと思えばすぐに飲むことができるため、当たり前のような存在になってしまっている。僕も、水に「ありがたさ」を覚えたことはなく、当たり前のように毎日使っていて、特別感を感じたことはなかった。こうした感じ方が今と昔の考えの差、つまり、「今と昔の水のあり方が変わった」のだと思った。

その「水のあり方」により、宅地化が進み、その結果、水が汚くなってしまった。それにより、全く関係のない魚などの生き物が減ってしまった。もう一度、昔のように「水のありがたさ」を考え、水のあり方を考え直してみなくてはならない。

佳作

命を守る水

近畿大学附属和歌山中学校　一年　平松（ひらまつ）　睦葉（むつは）

人間の体のほとんどが水でできています。性別や年齢で差はありますが、私たち子どもでは約七〇パーセントを水が占めているそうです。人間は、水と睡眠さえしっかりとっていれば、たとえ食べ物がなかったとしても、三週間ほどは生きていられると言われています。しかし、水を一滴も取らなければ、せいぜい五日ほどで命を落としてしまうことになります。これほど大切な役割を持っている水ですが、私たちは蛇口を開ければ安全できれいな水が出てくることが当たり前だと思っていました。水が使えることに対して、ありがたみを感じている人は、少ないと思います。

アフリカの南部の地域では、子どもたちの約四〇パーセントが不衛生な水を飲んでいます。以前ニュース番組で、小さな女の子がおいしそうに茶色く濁った泥水を飲んでいる映像を見てとても驚きました。その水は、泥や細菌、動物のふん尿などが混じった危険な水です。浄水処理をしないまま飲むと、抵抗力の弱い子どもたちはたちまち下痢を起こしてしまいます。汚れた水を主原因とする下痢で命を落とす乳幼児は、年間三〇万人、毎日八〇〇人以上にものぼっています。以前から厳しい生活を送っている国があるという話は、頭ではわかっていましたが、実際に映像を通じて知る現実は想像以上に厳しく、現実の話として受け入れるのに、少し時間がかかりました。

日本に住む私たちは、毎日簡単にきれいな水を手に入れることができます。当たり前すぎて、感謝する心を忘れてしまっている自分がいたことに、気がつきました。

では、私たちはこれからどうすればいいのかと考えました。まず、一番大切だと思うことは、日本の水源に感謝をして、一人一人が大切に使うことだと思います。以前の私は、シャワーを浴びる時や歯をみがくとき、水を出しっぱなしにしていました。しかし、他の国での現状を知り、大切に使うことを心がけています。「こまめに蛇口を閉める」「使うときは少しずつ出して、出しすぎない」「水は出しっぱなしにしない」など、身近なところで、大切に使う方法はたくさんあります。

次に大切だと思うことは、飲み水を増やす方法を考えることだと感じました。最近日本では、台風シーズンなどに大雨が降ると水害がよくおこります。土砂災害や家屋への浸水による被害は甚大です。その結果、雨の大部分が水資源として利用されないまま、海へと流れていきます。これからの日本はもっと森林を増やすべきだと私は思います。なぜ森林を増やすべきかというと、森林に降る雨は、ゆっくりと枯れ葉や微生物を含んだ土に染み込み、雨水が自然と浄化され、大地の成分を含んだ素晴らしい水となるからです。また森林は自然のダムとして働き、大雨が降っても恐ろしい土砂災害を防いでくれます。また、森林が増えることで、空気もきれいになり、一石二鳥です。

今、世界には水不足で困っている人がいること、今の生活ができているありがたさを私たちは常に心においておかなければなりません。人は水がなければ生きていけないことを改めて感じました。だからこそ、人の命を守っていくためにも、限りある水を大切にして次の世代へと、安全できれいな水を守り続けることが必要です。

佳作

水害を体験して

串本町立串本西中学校　二年　深海（ふかうみ）　六花（りっか）

二〇一一年九月四日。この日は紀伊半島大水害の日だった。この出来事は、私に「水の大切さ」を改めて知らせてくれた。

その時私は新宮市に住んでいた。そのため、私の家や近所の家は床下・床上浸水の被害を受けた。父が経営している店は床上五十五センチの被害が出て土砂も流れ込み、三ヶ月の間休業しなければならなかった。また、家も床下浸水、家の倉庫は浸かってしまった。家の周辺には、田んぼに車が突き刺さっていた所もあったそうだ。しかもこの日は祖父の通夜だったが、近所に住んでいる方々は水害に遭われたため、来られた方はとても少なかったと聞いている。

また、水害の影響で浄水場が被害に遭い、水が止まってしまった。歯磨きができなくなったりお風呂に入れなくなったりした。コンビニやスーパーでは、弁当やパン、カップ麺や水、お茶が全て売り切れていた。洗濯は雨水を貯めたビニールプールの水を使い、トイレは断水前にた貯まっていた風呂の残り湯を使った。家のお風呂には水が止まったから入れないため、断水の被害を受けなかった地域の温泉に入った。しかしどの温泉も行列ができており、身体を洗うところでは皆裸で順番待ちをするしかなかった。

やがて町に自衛隊がきれいな水を運んで来てくれるようになった。おかげで歯磨きや料理や洗顔、皿洗いなどができたりと、やっと水のある普段の生活に近づいていった。けれどまだ蛇口をひねってもきれいな水は出ず、家から離れた給水所までわざわざ取りに行くしかなく、とても不便な生活が続いた。

紀伊半島大水害によってもたらされた被害はとても大きく、県内では五十六人も亡くなった方がいたそうだ。この水害を通して「水は恐ろしいものであると同時に大切なもの」だということを私自身も知った。

大水害の時、私は小学一年生で、とても幼くて記憶が曖昧な所もある。でも蛇口をひねると汚れた水が出たり、自衛隊のヘリが真上を通って行ったり、食器にラップをしたりしてその上に食べ物を置いて食べたり、ペットボトルの水で生活したことをはっきりと覚えている。そんな「当たり前でない生活」をしていた時のことを忘れないでいるべきだと思う。

しかし、最近の普段の生活を振り返ってみたら、シャワーを出し過ぎてしまったり、手を洗う時に水を出しっ放しにしてしまったりと、水を大切には扱っていない。それらは全て私が「まあいっか」という一言だけで済ませている重い問題である。水害後は「節水」「水を大切に」というコマーシャル等がよく流れるようになった。だから私ももっと水を大切にしなければいけないと改めて感じている。「水のない、私達にとってあたりまえではない生活」を、これからも私達は考えなければいけない。

第４０回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

第４２回「水の週間」の行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

１　応募要領

①テ ー マ・・・「水について考える」（題名は自由）

②対　　象・・・中学生（中学生と同じ年齢の方を含む。）

③原稿枚数・・・４００字詰め原稿用紙４枚以内、日本語で表記された個人作品に限る。
題名・学校名・学年・氏名（ふりがな）を記入する。

④あ て 先・・・和歌山県庁　地域政策課
〒６４０－８５８５　和歌山市小松原通１－１
ＴＥＬ　０７３（４４１）２４２３

⑤応募期間・・・平成３０年５月９日締切り

⑥版 権 等・・・○応募作文は自作の未発表のものに限る。
○応募作品の版権は、主催者に帰属する。
○応募作文の返却は行わない。

２　応募結果

応　　募 学　校　数	応　　募 総　　数	学　年　別		
		１年	２年	３年
校 １０	編 ８１２	編 ４６９	編 ２７９	編 ６４

３　審　　査

和歌山県審査において、優秀賞３編、入選５編、佳作１０編あわせて１８編の入賞作文を決定。

（協　力　和歌山市中学校国語教育研究会）

４　表　　彰

（１）賞および賞品

賞	賞　　品
優秀賞	賞状、図書カード
入　選	賞状、図書カード
佳　作	賞状、図書カード

（２）表彰式

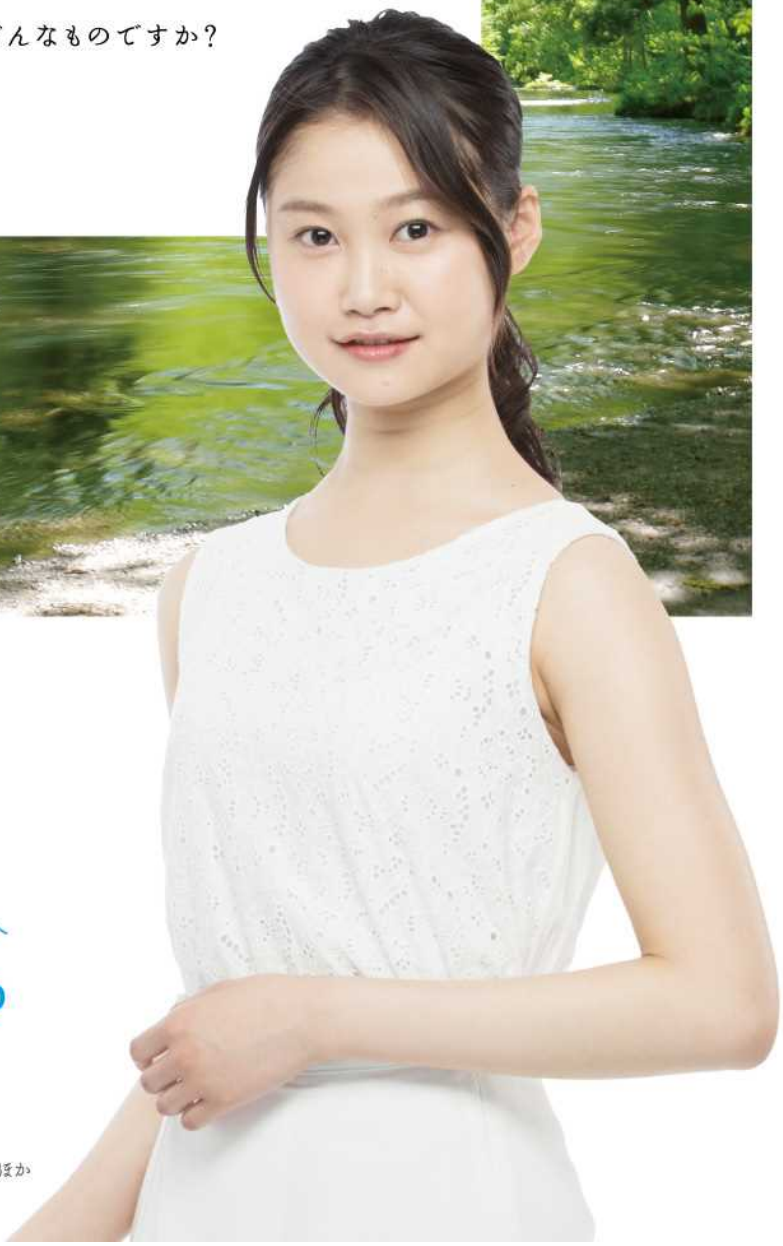
優秀賞の受賞者を平成３０年７月２３日、和歌山県庁において表彰

水循環基本法に基づき8月1日が「水の日」と定められました。8月1日～8月7日は「水の週間」です。

水は、大切でした。

私は健康と美容を意識して毎日たくさんの水を飲みます。
改めて考えてみると、森や川などをめぐり、人を支え、
循環している水はとても大切な存在でした。
みなさんにとって、水はどんなものですか？

2018ミス日本「水の天使」
浦底里沙



第42回
8/1
水の日
8/1～8/7は水の週間

「水の日・水の週間」関連情報はウェブサイトへ

http://mizunohi.jp

水の日　検索

主催：水循環政策本部、東京都、水の週間実行委員会ほか
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省ほか

「水の日・水の週間」に関する情報は各ホームページへ（首相官邸、国土交通省、水の日・水の週間）